

最近のシュライエルマツハー

研究書について(2)

高 森 昭

評者はさきに最近のシュライエルマツハー研究書について書評をしたことがある(神学研究・第二三号、一九七五年、一一二―一一八頁)。その続きとして今回は、まえにまとめた書評の後に発表されたシュライエルマツハーの研究文献を紹介したいと思う。その際に先ず、この書評を執筆した一九八一年一月までに入手した著作のなかから、対象をえらんでいることを了承して頂きたい。つきに前回の場合と同じく、多くの研究業績のなかから学位論文および教授資格取得研究書を中心に取りあげる方針を続けた点も御了解がいたく思っている。このような単行本として発表された文献に限定する方法には、若干の問題がのこることも承知している。しかし最も新しい研究の大勢を把握するためには、それは已むを得ないことと考える。なお上記の基準からは外れるが特にこの機会に言及する必要がある書物については、終りに簡単ではあるがふれておいた。それも参照して頂けると幸いである。

F. Wagner, Schleiermachers Dialektik. Eine kritische Interpretation, Gütersloh, 1974

書 評

弁証法Dialektikを包括的に研究した業績である。その意味では我々は G. Wehrung, Die Dialektik Schleiermachers (1920) が出て以後、ながく接することのなかった弁証法研究の成果を手にしたことになる。しかし著者はウェールンクが専ら歴史的な展開に関心を注いだのと異なり、弁証法の中に内在する思考の特色を明らかにする努力をしている。それは弁証法における直接的自己意識の構造を明らかにして、さらに信仰論における絶対依存感情とを対比させつつ、哲学と神学との関係を探ろうとする著者の関心に結びつく。この点で本書は問題意識のはっきりした業績であり、特にドイツ観念論との異同を全体的に知り得る点では便利である。しかし他面、鋭い指摘には全体として欠けるところがあることは否めない。むしろ後述する H. R. Reuter の研究と関連しながら今後も本書は話題とされる性格を持つと言える。

D. Lange, Historischer Jesus oder mythologischer Christus. Untersuchungen zu dem Gegensatz zwischen Friedrich Schleiermacher und David Friedrich Strauß, Gütersloh, 1975

本書はシュライエルマツハーとシュトラウスのキリスト論を比較した研究であり、むしろ一九世紀神学史研究にぞくする業績である。しかし本書前半に収められたシュライエルマツハーのキリスト論には、著者の力量のほどが示されており、書評に加えられることとなった。本書の特色はシュライエルマツハー

のキリスト論関係著作すべてにわたって、詳細な資料研究が行われていることがある。この点はシュトラウスについても同様である。著者はシュライエルマッハーのキリスト論においてイエスの歴史性が確保されており、それが同時に彼の神学と哲学とを関連づける核心となっているとの結論に到達する。他面、イエスの苦斗・十字架・裁きという側面に問題があることを批判している。全体として本書には膨大な材料をまとめ上げて行く巧みさが示されていると言える。一九世紀神学史に記憶されるシュライエルマッハーとシュトラウスの対決を扱った研究としても、本書は価値があると考えられる。

M. Trowitsch, *Zeit zur Ewigkeit. Beiträge zum Zeitverständnis in der Glaubenslehre* (Schleiermachers, München, 1976)

表題から明らかな通り、本書においてはシュライエルマッハーの時間理解が研究されている。著者はこの主題を論ずるにあたり、信仰論第二版パラグラフ五二の探究から論述を出発させる。すなわちそこでは神の属性として永遠が取り扱われているのである。著者は時間の根拠として永遠の問題を取り上げつつ、シュライエルマッハーが展開する神論の内容を吟味する意図を持っている。周知の如く信仰論が全体として神論を示すという性格をもつ以上、時間理解を軸とする本研究も、いきおい信仰論のすべてを覆うこととなる。時間の根拠に続いて時間の秩序、時間の完遂が論じられ、三一論 人間論、キリスト論、教会論が触れられるのはその為である。それだけに著者の努力は多と

するが、論述そのものにばらつきが目立ち、論旨が必ずしも一貫しないことが惜しまれる。本書は時間の主題を扱った特殊研究として、最近の業績の中で類例がないだけに残念に思われる。

H. Peiter, *Theologische Ideologiekritik. Die praktische Konsequenzen der Rechtfertigungslehre bei Schleiermacher*, Göttingen, 1977

著書は以前からシュライエルマッハーのキリスト教倫理研究で知られ、キール大学神学部講師をへて一九八一年からミュンスター大学へ転出した学者である。本書はシュライエルマッハーの思想が、義認論に規定された神学的なイデオロギー批判の役割をもつことを論じた著作である。その際にシュライエルマッハーがその倫理学において示した思索が重点的に分析され、叙述されている。したがって本書が取り上げる論議の範囲は、哲学的な倫理学とその信仰論への関わりに留らず、ルターへの義認論の解釈をめぐって更にシェーラーやテイリッヒとの討論に及んでいる。本書の特色は興味ある材料が豊富に備えられていると共に、明快な主張が全篇を通じて伺える点にある。しかし他面、主張の中心となるルターの義認論を始め、地道な立証の面では見劣りの感を禁じ得ないものがある。しかし東ベルリンにある未公開資料の取扱いには、流石にこの作業に年輪をかけた著者の力量が示されている。

V. Weymann, *Glaube als Lebensvollzug und der Lebensbezug des Denkens. Eine Untersuchung zur Glaubenslehre Friedrich Schleiermachers*, Göttingen, 1977

本書は信仰論に取り組んだ研究書としては恐らく七〇年代を代表できる業績であろう。著者はシュライエルマッハーの思想を、生の完遂としての信仰と思索の生への関連との中で捉える。

この視点から著者は信仰論の全篇にわたって詳細な検討を展開する。その際に信仰論の第一版第二版の双方が端念に取り上げられると共に、必要に応じて他の諸著作にも言及されている。最後に信仰論の研究をふまえた結論として、神学と哲学との関係が神論を中心に述べられている。本書は信仰論の内容に関して重厚な解釈を提供し得た点で、たしかに評価され得る内容を持っている。とりわけシュライエルマッハー神学の関心事を、現実の中に生きる事柄に関わるものとし、その展開の跡を信仰論全体の内に探ろうとした姿勢は刺戟に富んでいる。本書の表題はいささか奇異な感じを与えるが、著者が地道にテキストに密着して議論を続けることで、かえって全体として説得力を持ち得た好例となると思われる。

Th. H. Jørgensen, *Das religionsphilosophische Offenbarungsverständnis des späteren Schleiermachers*, Tübingen, 1977

著者はデンマークの神学者である。本書はシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関係を明らかにするため、その啓示概念に焦点をあてて行われた研究である。その際に後期の著作に限定して探究がなされている。シュライエルマッハーは啓示概念の適用にあたり、哲学的・宗教哲学的・神学的ないしキリスト論的な三者の区別を立てている。著者は前二者の内容を蔽

述することに可成りのスペースを与えているが、また信仰論の序論に見られるキリスト論的な啓示概念の特色をも明らかにする。上述の三段階は区別されるが、常に前のものは後のものを基礎づけ得ず、逆に後のものに対して開かれていることが論ぜられる。本書は一貫した論旨に支えられ良くまとまった研究として評価され得よう。詳細に検討すると刺戟のある指摘に出会う。例えば美学講義の中に見る原型の理論を、これまで多く引用されてきた原型 Urbild としてのキリスト論と関連させる試みはその一例である。

H. Falcke, *Theologie und Philosophie der Evolution. Grundaspekte der Gesellschaftslehre F. Schleiermachers*, Zürich, 1977

著者は東独の学者であり、これまでシュライエルマッハーの社会思想に関する業績を発表している。本書はそれらの研究をもとに始めて西欧ドイツ語圏で公表された著者の成果である。この意味で本書は体裁は小さいが価値ある研究ではないかと思われる。著者はまずシュライエルマッハーが初期著作において個と全体、主体と社会の関連を体系化する試みに成功しなかった点を指摘する。彼がそれを明らかにし得たのは後期の倫理学著作においてであったことが示される。その社会思想は当時の政治の現実と深く関与しており、彼は深い意味においてキリスト教の説教者であった。啓蒙思想、自由主義、ロマン主義に関わりつつ、自らは復古と革命の中間に独自の道を構想した思想家として、シュライエルマッハーが位置づけられている。本

書は決して目立たないが、かつてシビーゲルが発表した同種の業績 (Y. Siegel, *Theologie der bürgerlichen Gesellschaft*, 1968) のあとをうめる役割を果し得ると思われる。

R. R. Williams, *Schleiermacher the Theologian. The Construction of the Doctrine of God*, Philadelphia, 1978

本書はアメリカにおいて発表された興味ある業績である。著者は本書で主としてシュライエルマッハーの信仰論、とりわけその神論を扱っている。その際に著者はフッサールの現象学に刺戟されており、その手法がすでにシュライエルマッハーの信仰論に試みられていたことを強調する。このような関心に裏づけられて著者は、信仰論の全篇にわたる検討を展開している。

この意味では本書はまたシュライエルマッハーの神学を構造的に説き明かし、キリスト教思想史のなかに位置づける役割を果すように思われる。対立の一致をといったクザヌスや、神の不変性を述べたドルナーに注意を喚起する点も、そうした関連で記憶されてよいであろう。本書には随所に斬新な発想がおり込まれており、それらの学習は確かに有益である。しかし全体として細部にわたる立証の面は必ずしも一貫しておらず、それが弱点となる印象を与えるのは惜しいと思う。今後、著者がさらにスケールの大きな著作を出すことを期待したい。

H.-R. Reuter, *Die Einheit der Dialektik Friedrich Schleiermachers. Eine systematische Interpretation*, München, 1979

本書はシュライエルマッハーの哲学的名著である弁証法に正

面から取り組み、その内容を体系的に叙述した研究として異色の存在と言えるであろう。著者は弁証法の幅濶したテキストを解釈し直す作業を一貫して遂行し、シュライエルマッハーの試みが主観性に基づく近代思想の自己確信を打ち破り、形而上学的な実体思考の解消を目ざしていたことを明確にする。この点で弁証法の論述には統一が示されていると著者は解釈している。これまで弁証法の研究にあたって、その歴史的な思想発展を追うあまりにシュライエルマッハーの哲学的思考が一貫していなかったと理解され、その結果、神学思想よりの影響の面から弁証法の内容を批判するのが大勢であった。本書はそれに対する挑戦として評価される内容をもつものと思われる。さきに言及した F. Wagner の業績よりも一そう突込んだ洞察を著者は示しており、今後も本書はくりかえし言及されることであろう。ただ弱点を強いてあげるならば、従来の研究との対立点は今少しまとめて論ずる必要があったと思うのである。

B. Molter, *Das Handeln des Christen. Theologische Ethik am Beispiel von Schleiermachers Christliche Site*, Münsterschwarzacher, 1979

本書はカトリック学者によってシュライエルマッハーのキリスト教倫理がまとめられ研究された業績として意味をもっている。著者はカトリックの道徳神学が直面している困難な課題の克服をめざしつつ、シュライエルマッハーのキリスト教倫理学を通じて刺戟を見出そうとする。本書の大半はキリスト教倫理の構造、内容、機能などを叙述することに当てられている。詳

細にわたる記述は全体としてまとまっており、通読によって益する所が少なくない。シュライエルマッハーがキリスト教倫理を、キリストによって救済せられた者たちの行為として把握し、個々の中に現存する祝福としての自己意識を重視したことが著者にとり高く評価すべきこととされる。それは社会の上にな立つ教論ではなく、教会の社会における独自の方を構想した典型として理解される。この意味でシュライエルマッハーのキリスト教倫理学は今日エキメニカルな関心を呼びつつあると言えるであろう。

E. Schrofer, *Theologie als positive Wissenschaft. Prinzipien und Methoden der Dogmatik bei Schleiermacher*, Frankfurt a. M., 1980

本書もまたカトリックの学者がシュライエルマッハー神学の基本的な性格を綿密に探究した力作である。著者は神学通論、信仰論を始め神学著作の殆どすべてにわたって検討を行っている。それらは格別あたらしく指摘される事柄とは言えず、全体として地味な叙述となっている。しかしシュライエルマッハー神学の中心的な性格は落ち度なく触れられ、著者の視点から批判的な評価が加えられている。この意味では本書はカトリック神学において、シュライエルマッハーは如何に受けとめられているかを示す好例となる著作であろう。著者はシュライエルマッハーが明確にした神学の教会性と学問性の一体を高く評価しつつ、他方、伝統的教理の再構成に短格と混乱が見出されるとして批判をしている。著者の立場からすれば当然これは出て然

るべきものであるが、なお今後にも多くの討論を要すると思われる。しかし一五〇年の研究史をまとめて記した著者の力量など、通読して学ぶ所は少くない著作である。

W. Grab, *Humanität und Christentums-geschichte. Eine Untersuchung zum Geschichtsbegriff im Spätwerk Schleiermachers*, Göttingen, 1980

本書はシュライエルマッハーの歴史概念を、主として後期の著作をもとに研究したものである。シュライエルマッハーは歴史を間接的に主題として扱っているため、本書は難問にあえて挑戦した特殊研究として、その意欲が評価されて良いと思われる。著者にはシュライエルマッハーの思想における哲学と神学の関連を明確にする課題を、その歴史概念の検討を通して行う意図が明らかである。著者は人間性に基礎づけられた歴史の構成理論と、キリスト論を中心にキリスト教的意識の自己理解としての歴史把握との両面を、シュライエルマッハーのなかに不可分のものとして見出している。本書の特色は著者が論述にあたって、シュライエルマッハーの思想発展を追うことに力を注いでいる点であろう。しかし逆にそれが必要であるべき理論的な深みへの切り込みを強める役目を必ずしも果していないことは惜しい。しかし歴史概念の形成に関して、シュライエルマッハー自身にも明瞭でない側面が存在することの指摘は、考慮に値すると思われる。

この機会にその他のシュライエルマッハー研究関係の書物を幾つかあげて終りたい。

- K. Barth. *The Theologie Schleiermachers. Vorlesung Göttingen ws 1923/24.* hrsg. von D. Ritschl. 1978
- バルト著作全集の「環とこぶ」これまで未発表であった初期の講義が公けられたものであり、貴重な内容を提示している。
- Friedrich Schleiermacher. *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt* (1821/22). hrsg. von H. Peier. 2Bde. Berlin, 1980
- シュライエルマンハールの校訂版全集の先頭を切って刊行された信仰論第一版である。これにより信仰論第一版を第二版と対比し研究することが容易になり、益する所は大きい。なお欄外書込みを整理した三冊目は一九八二年中に刊行される予定である。
- M. Frank. *Das individuelle Allgemeine. Textstrukturierung und -interpretation nach Schleiermacher.* Frankfurt a. M., 1977
- シュライエルマンハールの解釈学を研究した業績として本書は重量感のある内容をもっていると言える。今後、解釈学を扱う論議のなかで、必ず言及され続けるであろう。
- A. Radler. *Religion und kirchliche Wirklichkeit. eine religionsgeschichtliche Untersuchung des Schleiermacherbildes in der swedischen Theologie.* Lund, 1977
- スウェーデン神学におけるシュライエルマンハールの影響や理解

を克明に跡づけた労作である。類書が始を見当らないだけに貴重な業績であろう。

E. H. U. Quapp. *Barth contra Schleiermacher ? "Die Weihnachtfeier" als Nagelprobe mit einem Nachwort zur Interpretationsgeschichte der "Weihnachtfeier"*. Marburg, 1978

シュライエルマンハールの降誕祭研究史を扱った書物として興味ぶかい。バルトの解釈に力点がおかれ、これまで通念とされてきたシュライエルマンハールとの対立に、ひとつの批判が提出されている。